豊橋文化

VOL.67 2026.10.15

［発行所］公益財団法人豊橋文化振興財団
［連絡先］豊橋市西小田原町123
TEL (0532)39-5211　FAX (0532)55-8192
年4回発行

朝晩の風に秋の気配が感じられ、空の青さもひときわ高く映る季節となりました。今号では恒例となりました「豊橋文化賞」「豊橋文化奨励賞」受賞者インタビューを掲載しています。日々の積み重ねの先に見えてきた景色や、次の世代へのまなざしなど、心に響くお言葉をいただきました。秋の夜長のお供に、ぜひご一読ください。

豊橋文化祭2026開会式典を開催しました。

令和8年度豊橋文化賞に松島庄千香さん、豊橋文化奨励賞に琳佳さんが選ばれ、表彰されました。

令和8年9月12日（土）、豊橋文化祭の幕開けを飾る開会式典が豊橋市民文化会館にて開催されました。式典は、日本壮心流剣詩舞道による記念公演で幕を開けました。近藤愛子さん・夕さん姉弟の剣武『桃太郎』が愛らしい舞を見せ、続く剣詩舞『弘道館に梅花を賞す』では、入倉昭星宗家・壮星宗家代行による力強い舞が披露されました。その後、長坂尚登豊橋市長、伊藤晴康理事長の挨拶に続き、豊橋文化賞・豊橋文化奨励賞、地域文化振興活動功労賞、郷土文芸作品特選者の表彰が行われ、受賞者からは心に残る挨拶があり、会場は温かな拍手に包まれました。続いて、松崎正尚豊橋市議会議長から祝辞がありました。

その後、豊橋音楽連盟による記念公演「音の彩葉（いろは）」が行われました。ギロックの2台ピアノ8手連弾で幕を開け、ウィルバーグ「カルメンの主題による幻想曲」でも再び8手連弾が披露されるなど圧巻の演奏に会場は大いに沸きました。フィナーレは、全員による鍵盤ハーモニカも交えたラヴィニャック「ギャロップ・マーチ」で、楽しく賑やかな演出に会場も笑顔に包まれ、華やかなひとときとなりました。



豊橋文化賞、豊橋文化奨励賞　受賞者インタビュー

豊橋文化賞 松島庄千香さん
（長唄・三味線 師匠）

― 長唄を始めたきっかけを教えてください。

始めたきっかけと言われてもはっきりしませんが、子供の頃家は料理屋をしていて、芸子さんが三味線を弾いているのを聞きながら、三味線を遊び道具にしていました。弾くというより遊んでいたっていう感覚です。だから知らないうちにやっていたというのが正直な感覚です。

私は昭和10年の生まれで、戦争で疎開したりでもう料理屋はやっていられませんし、三味線を弾くどころではありません。戦後も食べるのに精一杯の時代で、戦争で店も三味線も焼けてしまいました。でも戦後しばらくして落ち着いてから、浜松にいた母方の伯母も同じように三味線をやっていた人で、道具を譲ってもらい、母がまた稽古を始めたので、私も中学から高校くらいの頃に、少しずつ弾いてみるようになりました。

その後も、色々習い事が好きな性分で、結婚して名古屋に移った40年ほどの間も生け花やお茶、書道、民謡、ボーリングまで、いろんなものが好きで、少しずつ手を出していました（笑）。長唄だけは、名古屋にいながら豊橋まで松島庄文香先生のところにお稽古に通っていたんです。色々習い事をしましたが、結局最後まで残ったのは長唄でした。今考えると、やっぱり好きだったから続いたんだと思います。

―「松の実会」を引き継がれたそうですね。

もともとは母が始めた会でした。母の弟子たちも歳を重ねて、少しずつやめていく。母も歳をとって、思うように動けなくなってきた。そこで、私が代わりますと言ったわけではなくて、本当に自然に、私が名古屋から連れてきた弟子たちと一緒に、豊橋や蒲郡、名古屋のあちこちで稽古を続けるようになった。それだけのことなんです。

― 教える上で、大切にされていることはありますか。

大切にしているのは、古典です。昔のものを崩さないこと。自分でアレンジしてしまったら、もう他のものになってしまいますから、そこだけは変えません。昔から続いてきた型を、そのまま丁寧に伝えていく。それだけです。

91歳になった今も、週に3回ほど、お弟子さんたちが自宅まで稽古に来てくれています。続けてくれるお弟子さんたちには、本当に感謝しています。みんないい方ばかり。今は身内みたいな感じですね。

― 今の長唄を取り巻く状況について、思うことはありますか。

私が知っている中で一番盛んだった頃は、演奏会でも文化会館の舞台に三味線50人、唄50人、合わせて100人近くが並んで合同演奏をしたこともありました。踊りの方と、私たち長唄連中が地方として演奏する企画もありました。それが今では、多くて30人から40人がやっとです。長唄人口はどんどん減って、教える先生もほんの数人しか残っていない。このままでは、一部のプロの方しか残れなくなってしまう。それは、良いことではないと思うんです。高い山は、すそ野が広いから高くなります。色々なレベルの人がやっているということが大切なことではないかと思っています。

― 長く弾いてきた中で、印象に残っていることはありますか。

演奏というのは、三味線も唄も、みんなの息がぴったり揃っていること。誰か一人が先に走ってしまったり、遅れてしまったりすると、途端に山が崩れるみたいになってしまうんです。それが揃った上で、聴く人の心に残るような演奏ができたら、それが一番いい。なかなか、そう簡単にできることではありませんけどね。

昔、長唄演奏会の舞台で、「勧進帳」を5年ごとに、30年くらい唄わせてもらってきました。弁慶が、もう危ないというところで許してもらう場面があるんですけど、そこに来ると自分がその人物になりきってしまって、最後は涙が出てくる。ただ、これは自然に出てくるまでに時間がかかりました。演奏に一生懸命なうちは、なかなかそこまで感情が入っていかないものなんです。何十年も同じ曲を弾いてきて、ようやく分かってきたことです。長唄の深みが分かるっていうのは、やっぱり少し難しいのかもしれません。すぐに理解できるようなものではないかもしれません。

― あらためて受賞を振り返ってみて、いかがですか。

それはもうありがたいというか、嬉しいというか。ある程度の功績を残さないともらえない賞だと思っていたので、いただけたこと自体が信じられない気持ちでした。ただ、両親にも夫にも、もう見てもらえないので、みんなに見せたかったなと、すごく思いました。振り返ってみると、私の人生は本当に長唄に色どられた人生だったと思います。お弟子さんに恵まれて、楽しくやってこられた。このような賞をもらえて本当にみんなに感謝しています。

豊橋文化奨励賞 琳佳さん
（ジャズヴォーカリスト）

― 歌との出会いを教えてください。

みんな驚きますが、私、子どもの頃は人前で歌えない子だったんです。学校の歌のテストで、先生が伴奏している間ずっとうつむいて黙っている子、いませんでした?まさに私でした。習っていたのは電子オルガンで、コンクールにも出ていました。高校は浜松にある、日本で初めて電子オルガン科ができた学校に二期生として入学しました。全国から「電子オルガンで生きていく」という子が45人集まって、クラス全員がライバルみたいな感じでした。

でも、そこでも歌の授業があるんです。今でも覚えていますが、歌の授業は毎週木曜日の1時間目でした。1年生の初めに先生に当てられ、勇気を出して一人で立ち上がったのに、声がふるえて、ひっくり返って、教室は大爆笑。それ以来、歌の授業はほぼ欠席しました。担任に「テストだけは絶対出ろっ!」と言われて、その一度だけ、がむしゃらに歌いました。歌以外の成績は良かったんですよ（笑）。とにかく、歌うことは苦痛でした。

― 大学は作曲科に進まれています。

電子オルガンは、ピアノやギターはもちろん、トランペットの高音だって出せるんです。でも本物のトランペットは、青筋を立てて吹かないと高音は出ないじゃないですか。それも知らずに音色を使っている自分に気づいて、「私、他の楽器のこと全然知らないな」と思ったんです。それで、楽器のことをもっと知りたくて作曲科に進みました。でも、作曲科にも歌の授業はあるんですね（笑）。マスクをして、当てられると「喉が痛いので」と逃げていました。カラオケでは、みんなの曲をリモコンで入れる係を率先してやっていました（笑）。

― 歌い始めたきっかけは?

私、27歳で離婚しているのですが、そのゴタゴタで少し家出をしまして、車で江の島のあたりまで行って、これからどうしようと考えながら、普段は聞かないラジオをつけたんです。そこで流れていたジャズに本当に感激して、すぐに公衆電話からラジオ局に「2分前に流れた曲は何ですか?」と電話しました。教えてもらったのが、クリス・コナーの「バードランドの子守唄」。すぐCDを買いに走って、車の中で練習を始めました。人前で歌いたかったわけではなく、ただこの曲が歌えるようになりたい。それだけでした。

東京のジャズクラブでアルバイトをし、専門学校で6か月、ジャズシンガーの先生に学び、その後、家業の関係で実家に戻りました。すると、5つ上の兄がサックスプレーヤーになっていたんです（笑）。ジャズボーカルを勉強していると話したら、「来月の俺のステージに出ろ」と。歌えるのは2曲だけと言うと、「1か月で10曲覚えろ、寝る時間を削れ」と。厳しい兄で断れず、ステージが強引に決まってしまいました。

― 緊張はしなかったのですか?

覚えた歌詞を出すのに必死で、緊張どころではなかったです。とにかく無我夢中。その1回で終わる予定だったのに、一緒に演奏してくれた方々が色々なステージに誘ってくれるんですね。徐々に歌う機会が増えていき、自然と人前で歌う緊張も消えていきました。でも、実を言うと今でも急に緊張が蘇ることがあるんですよ。今はプロですから表には出しませんが。高校の同級生は、私がジャズシンガーになったことが信じられなくて、聴きに来てくれるくらいです（笑）。

― 歌声喫茶を始めたきっかけは?

「ほの国百貨店」の社長から頼まれたんです。当時の私は、やりたいのはジャズだけ。童謡唱歌を自分が楽しめるか分からず、お試しのつもりで引き受けました。ところが1回目から、感動して涙が出てしまって。30人に満たないお客さんでしたが、年配の方々がチラシを手に集まってくださり、定番の曲を20曲ほどみんなで歌いました。帰りぎわ、おばあちゃんが「楽しかったわぁ。また来るわね」と元気になって帰っていく。その姿が忘れられません。あの笑顔に、私のほうが元気をもらっているんです。

― 音楽への思いが変わったのですね。

昔は、全部自分のための音楽でした。電子オルガンで上達して自分をレベルアップさせたい。ジャズを歌い出したのも、離婚で傷ついた自分を癒したい気持ちがあったのだと思います。ステージに立つようになっても、歌いたい曲を歌いたいだけで、お客さんのために歌うという感覚はなかったんです。

でも歌声喫茶を始めた頃から、「自分のためにやってきた音楽を、人が喜んでくれる音楽にしよう」と思うようになりました。親は私にずいぶん投資したと思いますよ（笑）。だから、私が音楽で学んで得てきたものを、誰かが喜んでくれるなら全部出してあげたい。ジャズクラブで歌う私はジャズシンガーですが、私の歌で誰かが「楽しかったぁ」と過ごしてくれる時間になるなら、ジャズにこだわらなくていい。子どもの頃から学んできたものを、人のために全部出したいと、今はそう思って活動しています。

― やってみたいことはありますか?

いつかPLATや公会堂の大きなホールで、生バンドを入れて歌声喫茶をやってみたいですね。みんなで歌う、あの時間を大きな舞台で。ずっと考えていて、いつかチャレンジしたいと思っています!

今号の一枚



郷崎基

タイトル：夕鶴-Under the moon-
530mm x455mm
アクリル絵の具、オイルパステル、ジークレー

子供のモチーフをメインに
幻想的な世界観のデジタルアートを手掛けています。
ストーリー性のある絵を紡ぐことが好きです。豊橋在住

第68回 邦楽大会を開催します。

民謡・大正琴・三味線・太鼓・箏曲・長唄の部

▶**開催日時**／令和8年10月31日（土）午前10時30分開演　▶**会場**／豊橋市民文化会館　▶**入場料**／ 1,000円　▶**出演団体（出演順）**／伊藤民謡会、三河太鼓美友会、琴城流大正琴振興会豊橋支部、みついと会、箏曲加藤僖子社中、勝奈栄会、箏曲みどり会、生田流箏曲峰と海の会、紫雨会、つゆくさの会、箏 こでまり、奥田久子社中、華音

民踊・新舞踊・日本舞踊の部

▶**開催日時**／令和8年11月1日（日）正午開演　▶**会場**／豊橋市民文化会館　▶**入場料**／ 1,000円　▶**出演団体（出演順）**／葵民舞研究会、新舞踊紅豊会、日本民踊研究会東三支部、民踊むらさき会、静駒会、結月流元佳照会、鯉廣会、満帆会、花柳芯喜依の会

詩吟の部

▶**開催日時**／令和8年11月29日（日）午後1時開演　▶**会場**／豊橋市民文化会館　▶**入場料**／ 1,000円　▶**出演団体（出演順）**／日本壮心流、豊橋岳風会、朝翠流朝道吟詠会、朝翠流朝勢吟詠会、不朽流吟詠会、朝翠流照鵬吟詠会

気まぐれ プチ旅 VOL.25

邪魔にならない音楽と絵画、そして昼食

斧路朱音

安らかな眠りに就くときに聴きたいピアノ曲がある。エリック・アルフレッド・レスリ・サティの《ジムノペディ（第1番）》やクロード・アシル・ドビュッシーの《月の光》はその筆頭。“音楽界の異端児”あるいは“音楽界の変わり者”の異名をもつサティは、作曲した作品全体の傾向を＜家具の音楽＞と自ら称した。主な音楽活動の現場が酒場であった彼にとって、客の邪魔にならない演奏を心がけ、家具のように存在する音楽、つまり「生活の中に溶け込む音楽」を理想として追究した。1920年3月8日、彼は＜家具の音楽＞を、フォブール・サントノレ街にあるバルバザンジュ画廊で実行に移す。演劇上演幕間の休憩時間にクラリネット3本、バス・トロンボーン1本、ピアノ（連弾）1台で実験的な演奏を試みるが、当日のプログラムに、演奏される＜家具の音楽＞を“聴こうとせず、音楽に注意を払うな”と解説を載せてしまったことが原因で、失敗に終わる。休憩に入り、劇場の様々な場所にスタンバイしていた演奏者により演奏が始まると、聴衆は自分の席に戻り、静かに聴き入ろうとした。繰り返しが13回目に入ったところでサティは我慢の限界に達し、聴衆に向かって音楽を聴かずにおしゃべりを続けるよう怒鳴り散らし、ロビーを駆け回ったというエピソードが残る。

時代は下り、絵画の分野でも＜家具の音楽＞ならぬ＜家具の絵画＞を描き続けた画家がいる。失敗した演奏から12年後に、札幌で生まれた笠井誠一は、17歳の時に絵の道を志し、単身上京。『東京藝術大学』を経て、パリの『エコール・デ・ボザール』で学ぶ。帰国後は『愛知県立芸術大学』で教鞭をとり、後進を育成するかたわら自らも油絵を描き、［静物画］の分野で頭角をあらわす。複数の異なる視点で表現された対象物の形状を、太い輪郭線が優しく包み込む独自の様式を確立。彼の標榜した「生活の中に溶け込む室内画」は万人に愛されたが、昨年6月に惜しまれつつ、93歳で亡くなった。そんな画家の遺作展が『碧南市藤井達吉現代美術館』で開かれる。題して「笠井誠一展－色彩と形態が織りなす造形の世界－」（11月21日～来年1月11日）…意識され過ぎない“邪魔にならない絵画”を是非ご高覧あれ。



アートで心を癒した後は、お腹も充電したい。昼食のおススメは美術館を出て、徒歩2分の場所にある食事処『十一八』…何といってもここの名物は、良質な活鰻に地元碧南の『ヤマシン醸造』のたまりと『九重味淋』の極上みりんをブレンドした創業以来受け継がれた秘伝のタレを使い、備長炭で外側はカリッと香ばしく、内側はふっくらと焼きあげたうなぎ5切れが乗る《特上うな重》（きも吸い物付き）。他にも＜うな丼＞に＜刺身＞や＜もずく酢＞がセットになった《うな丼定食》をはじめ、《天丼定食》や《エビフライ定食》などがある。私の“邪魔にならない昼食”は、うなぎ2切れと刻んだ海苔と薬味ねぎの乗った《小まぶし丼》（きも吸い物付き）…ボリュームもあり値段もお手頃、結構満足できる。



〈展覧会情報〉
笠井誠一展 ― 色彩と形態が織りなす造形の世界 ―　会場：碧南市藤井達吉現代美術館　会期：2026年11月21日（土）～ 2027年1月11日（月・祝）

催し物スケジュール 11－1月

※この予定表は予告なしに変更になる場合がありますので、事前にお確かめください。入場料は前売料金。

市内文化団体主催および豊橋文化振興財団が後援する催し物を中心に掲載しています。掲載のご希望は、問合先までご連絡ください。

11月

1日（日）
第68回豊橋邦楽大会「民踊・新舞踊・日本舞踊の部」
時間／12時～　会場／豊橋市民文化会館ホール　入場料／1,000円

3日（火・祝）
第52回豊橋音楽連盟コンサート
時間／13時30分～　会場／豊橋市民文化会館ホール　入場料／1,500円
内容／豊橋音楽連盟会員によるピアノ、声楽、管楽器、マリンバなどのコンサート
（一社）東三河法人会 社団化40周年記念公演会
時間／14時～ 会場／穂の国とよはし芸術劇場主ホール 入場料／無料（抽選700名）
内容／1部:ミュージカル落語（作・演出 三遊亭究斗）、2部:ソング&ダンス（振付・構成・演出 加藤敬二）

5日（木）
MOA美術館　豊橋児童作品展・・・